

# 日本英文学会北海道支部 第63回大会プログラム

日時：2018年11月3日(土)

会場：北海道教育大学函館校

(函館市八幡町1番2号)

日本英文学会北海道支部



### 〈会場アクセス・地図〉



- 【函館バス】 JR函館駅ターミナル「函館駅前」から
- ・4系統で約15分、「教育大学前」下車すぐ。
  - ・27ループ107系統で約20分「教育大通」下車、徒歩約5分
  - ・14系統で約10分、「宮前町」下車、徒歩約10分
- 【車・タクシー】 JR函館駅から車で約10分、函館空港から車で約25分

### 〈懇親会のご案内〉

日時：11月3日(土) 18:00～19:30

会場：函館五島軒本店（函館市末広町4-5、電話0138-23-1106）

会費：一般会費5,000円、学生会費3,000円

\* 大学前～会場～函館駅～五稜郭本町の間、送迎バスが出ます。会場から函館の夜景が楽しめます。

\* 懇親会参加ご希望の方は、10月20日(土)までに支部ホームページ (<http://www.elsj.org/hokkaido/>) よりお申込みください。ご不明な点がございましたら、事務局 (Eメール: [hokkaido@elsj.org](mailto:hokkaido@elsj.org)) までお問い合わせください。

\* 昼食につきましては、大学の近辺にコンビニエンスストア、食堂、レストラン等があります。

\* 書籍展示：1号館1階第5講義室

\* 発表者・参加者控室：1号館1階第7講義室(茶菓の用意があります)

## 日本英文学会北海道支部第63回大会プログラム

日時：2018年11月3日(土)

会場：北海道教育大学函館校

(函館市八幡町1番2号)

**受付開始** (10:00～)(1号館事務局前)

**開会式** (10:20～)(大会議室)

開会の辞

日本英文学会北海道支部支部長

瀬名波 栄 潤

**理事会** (12:00～12:50)(大会議室)

〈**文学部門**〉(第2講義室)

**研究発表** (10:40～11:15)

司会 札幌医科大学名誉教授

森 岡 伸

*The Ballad of Reading Gaol*にみる無限の苦悩

北海道教育大学旭川校非常勤講師

本 間 里 美

**シンポジウム** (13:00～15:30)

箱館英学を繙く

文化的・地域的考察

司会

北海道教育大学函館校

星 野 立 子

講師

箱館英学研究家、函館英語英文学会顧問

井 上 能 孝

講師

釜石ぎんどろの会会長、元釜石市立図書館長

中 村 公 一

講師

北海道立近代美術館学芸員

大 下 智 一

〈**語学部門**〉(第6講義室)

**特別講演** (10:40～11:50)

司会 北海学園大学

上 野 誠 治

ゲルマン祖語から見た英語統辞法の特徴

ゴート語聖書翻訳を参照して

東北大学名誉教授

千 種 眞 一

**シンポジウム** (13:00～15:30)

コーパス英語学の最近の試み

司会・講師 北海道教育大学函館校

福 田 薫

講師 北海道教育大学札幌校

本 多 尚 子

講師 北海道大学名誉教授

園 田 勝 英

〈文学・語学部門共通〉（第2講義室）

特別講演（15:50～17:00）

司会 北海道教育大学函館校 上山 恭 男  
英語教育の歴史に学び、現状を問い直す  
和歌山大学 江利川 春 雄

総会・閉会式（17:10～）（第2講義室）

閉会の辞 日本英文学会北海道支部副支部長 上野 誠 治

懇親会（18:00～19:30）

場所：函館五島軒本店（函館市末広町4-5、電話0138-23-1106）

〈発表要旨〉

## 〈文学部門：研究発表〉

*The Ballad of Reading Gaol* にみる無限の苦悩

本間 里美（北海道教育大学旭川校非常勤講師）

オスカー・ワイルド (Oscar Wilde, 1854-1900) の『レディング監獄のバラッド』(*The Ballad of Reading Gaol*, 1898) は、自身の獄中体験と、妻殺しの罪で死刑宣告された元騎兵の囚人チャールズ・トーマス・ウールドリッジ (Charles Thomas Wooldridge, 1866-96) を歌ったものである。この詩のなかで描かれる円運動を連想させるような繰り返しの表現に焦点をあてるとき、そこに反映された作者の救いのない苦悩が浮かび上がる。これは作者が自身をウールドリッジに重ね、熾烈な獄中生活での苦悩や死を通して苦しみや悲哀を知った者として救済へと向かう希望を見出そうとした一方で、肉体的な死では終わらない永遠の絶望をも表現したことを示している。逃げ出すことができない苦悩の昼夜の時間の表現の繰り返し、語や構造の反復、永遠の苦悩を示唆する円運動を連想させる表現、赤と白の色彩の反復の可能性、生と死・罪と救済の概念の考察を通して、この詩に表れた無限に続く作者の苦悩と苦痛を明らかにする。

## 〈文学部門：シンポジウム〉

箱館英学を繙く  
文化的・地域的考察

司会 星野 立子（北海道教育大学函館校）  
講師 井上 能孝（箱館英学研究家、函館英語英文学会顧問）  
講師 中村 公一（釜石ぎんどの会会長、元釜石市立図書館長）  
講師 大下 智一（北海道立近代美術館学芸員）

「英学」とは、主に幕末・明治期における、英語や英語圏の文化などに関する学問である。たとえば、英文学に関する草創期の代表的な受容としては、外山正一・矢田部良吉・井上哲治郎共編『新体詩抄』(1882(明治15)年)における、テニソンの詩やシェイクスピアのハムレットの独自の翻訳があり、その後、坪内逍遙が活躍する。

箱館(1869(明治2)年に函館に改称)は、1854(嘉永7・安政元)年にペリー提督率いる黒船が来航して以降、アメリカ、イギリス、フランス、ロシア等、欧米諸国の文化が次々と入るなかで、英学に関しては、通詞の養成などで、英学の拠点として独自の地歩を築いた。

今回のシンポジウムでは、箱館英学の歴史を繙き、日本近代製鉄の父と呼ばれる大島高任と箱館英学の関係、そして箱館英学の時代の文化的背景に関する研究報告を通して、箱館英学の役割と意義について文化的かつ地域的に考察する。

## 開港場箱館の諸術調所

井上 能孝

国際観光都市・函館の異文化流入への原点に遡及すると、開港場箱館にペリー黒船5隻の来航によって、いわゆる〈箱館英学〉の英語耳学問が開花した。例えば、「トマラエ」「バンバエ」「トテ」「タンキョウ」など。それは箱館庶民の英語耳学問で、商人、船頭、船大工、そして名主・小嶋又次郎の「亜墨利加一条写」など異色の箱館英学が根付き且つ開花し始めた。

本年は探検家・松浦武四郎が蝦夷地を「北海道」と命名して150年の節目の年に当たる。それ以前の蝦夷地の開港場箱館の西部地区に、「諸術調所」という蘭学と英学を教える学問所が開所された。

この諸術調所を立ち上げたのは蘭学者・武田斐三郎で、のちに五稜郭を設計した。武田斐三郎は箱館に約8年間勤務し、前島密(日本郵便制度の創始者)や山尾庸三(江戸にて英学を教授)など錚々たる愛弟子を育成した。箱館に黒船来航の折、幕吏と一緒に武田が来箱していたのは奇跡と言うべきか。

## 大島高任と箱館英学

中村 公一

江戸幕府は、蝦夷地開発のため、米国公使ハリスの周旋でアメリカから二人の鉱山技術者を招き、蝦夷地の鉱山開発とそのための技術者の養成を企図する。箱館奉行所は、武田斐三郎の提唱により、諸術調所を開設していたが、彼一人が教授として、語学・測量・航海・砲術・築城・舎密(化学)などを教えていた。大島高任は幕府に願い出て箱館に赴き、江戸象先堂塾で同門だった武田と再会し、御雇いアメリカ人技師ラファエル・パンペリーとウィリアム・ブレイクから、鉱山開発の技術を学ぶ。さらに、小出箱館奉行の命で武田とともに坑師学校を開設した。武田はこの頃五稜郭(箱館御役所土塁)の建設にかかりきりで、実際は、大島が専心していた。元治元年に武田が江戸開成所教授となり、大島一人が学校を切り盛りする。全国の各藩から、この坑師学校へ俊才たちが参集し、全国の鉱山開発が進む。

本発表では、大島高任の功績と箱館英学との関わりについて考察したい。

## 幕末・明治初期の箱館写真事情

大下 智一

1854(嘉永7・安政元)年に来航したペリー艦隊に同行したエリファレット・ブラウン・ジュニアによる写真撮影は、日本における「写真体験」の先駆けとなる出来事だった。その舞台のひとつとなった箱館では、その後も欧米諸国の領事館において写真撮影が行われた。また、箱館に滞在した外国人から、写真という先端の技術を習得しようとする箱館在住の日本人も現れ、なかから横山松三郎、木津幸吉、田本研造らはその後職業写真師として活躍した。そうした人々によって撮影された幕末・明治初期の箱館(函館)の写真群は、写真術の受容期における貴重な作例として、現在に伝わっている。

ここでは、箱館英学の時代の文化的背景として、幕末・明治初期の箱館における写真術の受容と広がりをもとに紹介する。

## 〈語学部門：特別講演〉

ゲルマン祖語から見た英語統辞法の特徴  
ゴート語聖書翻訳を参照して

千種 眞一（東北大学名誉教授）

ゲルマン語最古の文語であり、東ゲルマン語に属するゴート語は印欧語比較文法でゲルマン祖語に最も近い言語として位置づけられている。その主要な文献はギリシャ語福音書の翻訳である。一方、西ゲルマン語群に属する英語は祖語ないしゴート語からは遠くに位置すると見られるが、古英語にもウルガタ訳に依拠した翻訳が残されている。聖書翻訳は原典に忠実であって模倣もよく見られることは指摘されながらも、言語が内的に一貫した固有の統辞法的規則の集合からなる言語体系であるからには、私たちに残された文献がたとえ翻訳であっても、その作業が当該言語の規則に従って行われていたと考えるのは自然である。翻訳時期や原典言語に違いはあっても、両言語は比較の対象としての資格を十分にもっている。英語におけるいくつかの統辞法的現象について、ゴート語訳とも対照させながら、英語の福音書翻訳にどのようなゲルマン祖語の特徴と独自の発達が見られるかを考えたい。

## 〈語学部門：シンポジウム〉

コーパス英語学の最近の試み

司会・講師	福田 薫（北海道教育大学函館校）
講師	本多 尚子（北海道教育大学札幌校）
講師	園田 勝英（北海道大学名誉教授）

言語研究に何らかの形でコーパスを利用するアプローチが定着し、さらに大きな進展を見せている。コーパスアプローチの特徴は、コンピュータによって大規模な実例データを処理し、内省では得られにくい数量化された情報に基づいて、語彙と語法を中心に据えて言語使用に関わる研究課題を解明しようとする点である。現在では、各種のコーパスが構築され、多様なデータ解析機能を提供するツールが開発されている。これらを活用することにより、語彙とその用法を基盤とする文法をはじめ、言語教育、機械学習、テキスト分類、言語変異と史的变化、メタファー研究、類型論など、多岐にわたる分野において新たな知見が発表されている。

北海道支部におけるコーパス英語学系のシンポジウム企画は初めてなので、コーパスの活用方法や注意点とともに、この分野における近年の成果の一端を紹介したい。3名の講師は、それぞれに異なる関心と目的の下、異なるコーパスを利用した研究を発表して、幅広い領域におけるコーパスを活用した英語学研究の具体例を示したい。

（文責 福田 薫）



## One's way 構文の発達に関する史的コーパス研究

本多 尚子

英語には、(1)に見られるように動詞の直後に one's way という句が後続する構文が存在する。

- (1) a. Jim made his way through the crowd.  
 b. I was wearing, like, five-inchers and I'm working my way up.  
 c. Bill belched his way out of the restaurant. (Jackendoff (1990: 211))

当該構文は one's way 構文と呼ばれる。

さらに、one's way 構文は、以下の3つの下位タイプ、すなわち、「手段の one's way 構文」、「移動の one's way 構文」、「様態の one's way 構文」に分類できる。

本発表では、史的コーパスを用いた one's way 構文に関する調査結果を示し、英語において one's way 構文自体はいつ初出したのかと one's way 構文の下位3タイプはそれぞれいつ初出したのかを明らかにする。そして、それらの結果を理論的に説明可能な意味的・統語的分析を提案することにより、前述の変化を引き起こした要因は何であり、その結果、それぞれの文はどのような統語構造を持つに至っているのかを解明する。

## 名詞から分量詞への文法化の程度を測る

福田 薫

NP1 of NP2 という構造が表しうる多様な意味関係のうち、たとえば、a cup of the coffee「そのコーヒーの入った1カップ」ではNP1とNP2の間に部分と全体の関係が認められるのに対し、a cup of coffee「一杯のコーヒー」のcupはもはや文字通りのカップではなく「カップ一杯分に相当する量」という分量を表している。後者は擬似部分構造と呼ばれ、語彙的な名詞から意味内容の薄れた分量詞へと、意味や機能が変化している。現代英語には両構造が併存するが、いくつかの統語的ふるまいの違いによって区別可能である。

本発表は現代英語コーパスを利用して擬似部分構造化という文法化の過程が共時的変動として存在することを示す。具体的には、NP1として動物の群を表す語 (herd, flock, school, swarm, pride) を含む用例を COCA コーパスから検索し、共起する NP2 の種類の拡大および N2 が主要部と解釈される割合を指標として、統計解析を用いて対象語が文法化している程度を比較する。

## 辞書に基づく語彙研究の可能性

園田 勝英

1980年代後半に行われた *The Oxford English Dictionary (OED)* の電子化によって、この偉大な辞書を一つのデータベースとして活用することが可能になっている。一方、英語を母語としない人のためのいわゆる英語学習辞典においては、コンピュータコーパスの発展とともに、収録語彙の選定や各語彙項目の記述が飛躍的に精密化している。その代表的な例として、*Longman Dictionary of Contemporary English* をあげることができる。本発表では、これらの二つの辞書の電子版を利用して、英語母語話者がその心的辞書に持つ動詞語彙全体を観察対象とする。具体的には、*OED* の語源情報に基づいて動詞語彙を下位類に分類し、それぞれの類が持つ文法的特徴を整理し、さらに類の間の関係を明確にする。しばしば漠然と英語語彙は本来語とロマンス系の語から成る

などと言われるが、その実態の詳細をコンピュータの力を借りて明らかにしたい。

## 〈文学・語学部門共通：特別講演〉

英語教育の歴史に学び、現状を問い直す

江利川 春雄（和歌山大学）

今日の英語教育改革の眼目は、①小学校英語教育、②主体的・対話的で深い学び、③英語による英語授業、④英語4技能入試だが、実は江戸期・明治期から実践されてきた。講演では、そうした歴史から学び、現在の英語教育政策を問い直したい。

①小学校英語教育は明治中期から本格化した。反対論も多く、顕著な成果を挙げられなかった。②主体的・対話的で深い学びは江戸時代の会読にまで遡り、明治以降も推奨された。③西洋学術語の翻訳に成功し、日本の大学は明治10年代には日本語でも授業を行えるようになった。英語教育における英語／日本語の使い分けも、明治末期に定式化された。④英語入試への聴解・会話試験の導入は明治前期に実施され、中断を経て大正期に何度も提言されたが、実施は困難だった。

過去の教訓から学ばない改革は破綻し、過去に根を下ろさない学問は根なし草となる。そうさせないために、歴史から謙虚に学びたい。